



TITLE:

【学会記事】ピーター・クラーク 教授特別講演会

AUTHOR(S):

八木, 紀一郎

CITATION:

八木, 紀一郎. 【学会記事】ピーター・クラーク教授特別講演会. 経済論
叢 1993, 151(4-5-6): 234-235

ISSUE DATE:

1993-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/44883>

RIGHT:

經濟論叢

第 151 卷 第 4・5・6 号

中核企業によるサプライヤーのリスクの吸収……………	浅 沼 萬 里 菊 谷 達 弥	1
ジョン・ミラーにおける商業社会と軍事精神……………	田 中 秀 夫	42
香港をめぐる内外銀行の過渡期戦略……………	佐 藤 進	62
アジア NIEs 工業化過程の 政治経済学研究(2)……………	宋 立 水	84
テレコム・エコノミックスにおける 公的規制をめぐる(1)……………	西 田 達 昭	105
現代日本パソコン市場における IBM の 国際マーケティング……………	佐 久 間 英 俊	120
組織環境認識の視点……………	崔 俊	141
韓国資本主義論争の性格……………	李 東 碩	161
ドイツ民主共和国の経済とコンビナート(1)……………	北 村 喜 義	186
中国経済と香港……………	姚 国 利	213

学 会 記 事

平成 5 年 4・5・6 月

京 都 大 学 經 済 學 會

【学会記事】

ピーター・クラーク教授特別講演会

ケンブリッジ大学の現代イギリス政治史教授で、経済学者のあいだでは Keynesian Revolution in the Making 1924-1936, 1991 の著者として知られるピーター・クラーク博士 (Dr. Peter Clarke) が、1993年3月31日に来訪され、同日午後特別講義室で講演会が催された。演題は「第一次大戦前後のイギリス自由主義と国家の経済的役割」であったが、教授の提供されたアブストラクトがあるので、それを翻訳して内容紹介に代えたい。

「この講演のテーマは、“自由放任の終焉”を経験する時期にリベラルな個人や勢力が国家の役割についてどのような観念をもっていたかということである。講演はまず、19世紀末における極小国家にとっての“グラッドストーンのアジェンダ”を説明することから始められる。そのあと、20世紀初頭のニュー・リベラリズムがこうした見方にどのように挑戦したのかという問題をとりあげる。自由貿易の教義へのリベラルの信奉には変わりがなかったということが重要な点である。第一次大戦の後になっても、大蔵省的正統派は、価格はフレキシブルであるという古典的想定の上に立脚していた。そこから金本位制への復帰を支持する立場が出てくる。しかし、現実の世界のなかでイギリスが直面していた実際的な調整の問題は、ケインズをして、代替的な政策を定式化させた。1929年に自由党が公共事業についてのケインズの提案を採用したとき、自由党は、一見、グラッドストーンの伝統を否認したように見えた。しかし、この講演が結論とすることは、経済政策上の変化は外見ほどには根本的なものではなく、20世紀のケインズ主義は19世紀のグラッドストーン主義ほどの堅固なイデオロギー的基礎を欠いていたということである。」

討論では博士の前著 Lancashire and the New Liberalism, 1971 にかかわる専門的な事柄も議論されたが、この報告記事の筆者はケインズ主義も高賃金→有効需要という左派ケインズ主義は大衆的基礎を持ったのではないかと質問した。実は労働党内部でのケインズ主義の受容の問題は博士のいま一つの研究テーマである。クラーク博士のような政治史家の仕事とふれあうことによって、わが国の経済思想・経済政策史研究がよりリアリスティックなものになることを願ってやまない。なお博士の来日は、長崎大学教養

部の姫野順一教授が中心になって企画され、日本学術振興会の招聘によって実現したことを記して関係者に感謝したい。

(八木紀一郎)